

『観音経』の日本的展開

吉澤秀知（大正大学）

『観音経』とは、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「観世音菩薩普門品第二十五」のことである。日本仏教宗派では各種法要の際にも読誦されることの多い有名な経典の中の一つである。

『観音経』の主人公である観世音菩薩に関する霊験譚は多数あり、また『観音経』、観世音菩薩に関連した出版物や、寺院における講話や法話の類いは数限りなくある。日本だけでなく大乘仏教を信仰する諸地域においても、多くの人々の心の拠り所となっている。東アジアの仏教圏では、この経典の主人公である観世音菩薩像が数え切れないほど大小様々に祀られ、「念彼観音力」の文句とあわせて観音信仰が力強く根付いている。日本各地では観音霊場が生まれ、多くの人々が巡礼のために集まってくるほどである。

しかしながら、『観音経』とは何か、観世音菩薩とはどのような菩薩なのかということになると、はっきりしない部分が多く残されていると言わざるを得ない。日常的に読誦される経典であるにもかかわらず、その経典の語句の意味や内容を理解できているのだろうか。この経典に説かれる内容は、表面上は分かりやすいものではあるが、経典の語ろうとしている本質を掴んでいるのであろうか。何故『観音経』が日本へと至るまでに多くの人々に受け入れられてきたのか、さらには、日本における観音信仰を理解するためには、その根底にあるものとは何なのか。このような部分を解明する方法として、梵文『観音経』と鳩摩羅什訳『観音経』について一語一句の比較検討を行った。

それによりあらわれたのは、梵文原典と漢訳という言語体系の違いだけでは説明のできない文章構造の改変である。翻訳に使用された原典がどのようなものであったかは不明ではあるが、現在見ることのできる鳩摩羅什訳『観音経』は、様々な部分で原典にはない語を補うことで、当時の中国の人々にとって『観音経』をわかりやすくなるように考えて、苦心して翻訳されたのであろうことは想像に難くない。また、多くの先人達の研究によってこの『観音経』に説かれる内容が分析され、七難・三毒・二求両願・三十三身十九説法という分類がされ、仏教の修行体系にあてはめ、研究がなされてきた。

本発表では、経典の内容と修行体系の分類を元にしつつ、原典との比較から見える、鳩摩羅什によって付加された様々な語句によって作り上げられた文章構造、特に『観音経』内に組み込まれた「聞・持・称」の構造、称名の階梯、修行体系などについて、また、何故このような階梯を組み込む必要があったのかを考察する。観世音菩薩を信仰することによる現世利益を説きつつ、仏道に進む方法を示しているこの『観音経』が日本に受け入れたのは何故か、『観音経』が説き示そうとしたことは何かを解明することを目的とする。

《キーワード》 法華経、観音経、観世音菩薩、鳩摩羅什、称名